
見晴台でもう一度

寄木川奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見晴台でもう一度

【Nコード】

N1242W

【作者名】

寄木川奈留

【あらすじ】

海辺の町のボランティア活動

「夢をかなえることが夢」という大学生

木内浩一郎と幼馴染3人たちのストーリー

寝坊

「浩一郎」なんか遠くで聞こえている。

「お兄ちゃん、間に合わないよ」

妹がドアをガンガン叩いている。

手を伸ばし枕元の携帯をひらいて時計をみる

午前4時46分。

「ヤバイっ、マジヤバイ」瞬間に僕はベットから飛び起きた。

今日は一週間に一度幼馴染たちと海に行く火曜日だ。

10分くらいで準備をすます。

5時14分の始発電車に乗る。

途中乗り換えて7時まえには海辺の駅に着く。

幼馴染たちとは約束ではないがいつも5時に駅前のファーストフード店で待ち合わせをしている。

近道

「いつてきまあす」誰にでもなく家中にきこえるように声をかけた。自宅は祖父の代から花屋を営んでいる。

自宅とつながっているので急ぐときは店をぬけたほうが早い。

生花市場へと向かうスタッフたちがもう店にきている時間だ。

店へのドアをあけると僕のことを社長とおもったのか何人かの

スタッフたちが大きな声で「おはようございます」とあいさつしてきた。

僕の顔をみたとたんに「なんだよ、浩一郎か」みたいな顔をしている。

「おはようございます、ごくろうさまです」と一礼して僕は店の入

り口

へとすすんだ。

ダッシュ

花屋の長老、辰さんがすれちがいざま

「浩一郎、早えな」と声をかけてきた。

「そつちもね」と僕は言い辰さんと軽く

握手をかわして店をでた。

本当の深い意味はわからないけど

うちの店は僕がまだ小さいころからスタッフ同士

あいさつをして握手をするのが習慣になっている。

子供のころは恥ずかしくてしないときもあったけど

いまでは僕の友達の間でも「あいさつの握手」は

あたりまえになっている。

こうして店を出たのが5時02分だった。

駅まではダッシュなら5分くらいでいける。

とりあえず駅前のファーストフードにいる

幼馴染たちに「あと5分、改札で」と短い

メールを送り走り出した。

ぎりぎりだった

大学までの定期券があるので切符は買わずに改札は通ることができ
る。

なんとか間に合うか。

今日えはファーストフードのモーニングはあきらめて改札へ向かっ
た。

途中、信号につかまり駅前に着いたのは5時10分。改札には幼馴染
染の

「貴英」「修平」「和人」の3人が立っているのが見えた。

僕はダツシュしてきたのを見破られないように呼吸を整えて改札に
向かった。

「ういつす」と3人と握手をかわした。

貴英は「浩一郎、ぎりぎり〜」修平は1回転して両手を広げて「セ
ーフ」、

和人は「浩ちゃん、ダツシュなの？」と完全に見破られ大笑いされ
た。

どうも妹が貴英にメールをしていたらしい。

貴英の「やばいつ、いくぞっ」の合図で僕たちはホームへ進んだ。

こうして5時14分、始発電車に乗り、いつもの僕たちの火曜日が始
まった。

木内浩一郎

木内浩一郎。22歳、地元の大学に通う大学3年生。

家族は祖父、祖母、父、母と短大に通う妹の6人。

家は祖父の代からこの土地で花屋を営んでいる。

いまは父が店を任されていて祖父は現役を引退している。

まわりは僕のことを「三代目」と呼ぶが自分はまったく

考えたことがない。祖父は常連さんたちには「継いで欲しい」

みたいなことを言うみたいだが家族ではなしたこともない。

以前に妹が「お兄ちゃんは何店継ぐの?」と聞いてきたことがあったが

「花屋はきついし休みなくねえ?」ってこたえたくらいだから。

もちろんいまもいそがしい時は手伝っているけど将来のことは

まったくもってかんがえていない。

まず大学をちゃんと卒業しないと、、、。

火曜日はボランティア

年間を通じて毎週火曜日は幼馴染の貴英、修平、和人と僕の四人で海へ通っている。

海といっても海水浴でもサーフィンでも釣りでもない。

海辺の町でおとしより向けのボランティア活動をしている。買い物に行ったり、一緒に散歩したり、草むしりしたり。

僕たちが通う「海寄町」は若い人が少なく、何年かまえに町がボランティアを募集した。

たしか僕たちが高校2年生のときだったと思う。

そのときはみんなで海水浴に来ていて帰りのバス停

にある掲示板のポスターを見て誰からともなく「やるっか」となり申し込んだのを覚えている。

「海電」

もう5年も通っているので海寄町のひとたちは僕たちのことを知っている。町の公民館がボランティアの控え室になっている。地元の人たちがロッカーを設置してくれたので手ぶらで通っている。今日は貴英が公民館に遊びにくる女の子にと「算数ドリル」をもっている

だけで他は全員手ぶらで始発電車に乗った。

この始発電車は海につりに行く人たちで平日、休日を問わず混雑している

ことから「海電」と呼ばれている。

鉄道会社もシーズンになると「海電に乗って夏を楽しもう」みたいなポスター

を各駅に掲示しているのをみかける。

今日も火曜日だといふのにかなりの混雑だ。

特に「乗り換え駅」の連絡通路が先頭といふことや接続時間が1分しかないという

こともあり1両目と4両目くらいまではいつも座れる状況ではない。後ろの車両に乗っている人たちも接続時間が短いことはわかっているので

「乗り換え駅」が近づくとそろそろ前の車両へと歩いている。

女の子

僕たちはいつも6両目。すこし席に余裕がある。でも見たことのある人が

多い。常連というか僕たちもそうなのだが不思議と人はいつも同じような

場所をえらぶ。僕たちは6両目、進行方向中央の右側に座ることが多い。

この車両の人をすべて見渡すことができる。

半分以上はここも「釣り」に行く人たちだがサラリーマン風の人や一般の

人たちも何人が乗車している。

僕は今日は「寝坊」から始まりやっとおちついたというか席に座り「ふー」っと

深い息を吐き、しばらくぼーっとしていた。と同時にものすごい睡魔に襲われた。

たぶんそのまま眠っていたのだろう。和人の「修平君、どうしたんですかあゝ、もう」

という声ではっと目が覚めた。

続けて貴英が「修平」僕は斜め前の席を見ていた。そこに座っていた女の子の

姿がない。実は修平はその子のことが気になっているらしい。僕たちは修平に

「声をかけたら」といつも言っている。その子は7個目の駅で降りる。僕たちが

乗る駅から時間にして25分くらいだ。僕は隣にいる修平には声をかけず肩をかるく

2回たたいた。でもよく考えたらまわりにみんながまわりにいたら修平じゃなくて

自分だって声はかけられないような気がする。声をかけられる彼女
だってどうして良いか
わからないだろうし。今度、修平にゆっくり聞いてみようと思った。

「間に合わないかも」

僕は気がついたらまた寝ていたらしく隣の修平が

「浩一郎」と肩をたたいてくれて目を覚ました。

乗り換え案内をする車掌さんのアナウンス。

僕たちの前を先頭へと移動する人たち。

僕たちも席を立ちゆっくりと車内を歩き始めた。

乗換駅に電車が到着すると一斉に乗客たちは走り出す。

これもいつもの光景だ。

釣竿を持ちクーラーボックスを担いで走る人たち。

僕たちはその集団を追いかけるように走り出す。

かならずこの短い乗り換え時間にはこの連絡通路で

息がきれたり、荷物を落としたりする人を見かける。

「まもなくベルが鳴り終わりますとドアがしまります」

「お急ぎください、まもなくドアがしまります」と

階段の上のホームからアナウンスがきこえてくる。

ホームへ上がる階段。階段を上げればすぐ電車が

停車している。

僕たちは毎週なのでこの階段にきていれば間に合うことはわかっている。

階段を見るとどうみても釣りに行くだろう白髪まじりの

男性がうちの前を苦しそうに階段をのぼっている。

「間に合わないかも」僕は心の中でそう思った。

男性

実は「海電」といわれる始発電車に乗り、この乗り換えで接続電車に乗れるか乗れないかで「釣り」に行く人たちは一日を無駄にしまうことになる。

終着駅の川辺駅には6時50分につく。改札前のロータリーにはたくさんの釣宿のマイクロバスが迎えにきており、そのバスは7時に出発する。この「川辺駅」から港までは歩いて行けないことはないが30分以上かかる。そのため7時半に出船となる釣り船屋さんたちが駅から港までの送迎をおこなっている。もしこの電車に乗りおくれ次の電車になれば「川辺駅」につくのは30分以上遅くなりその日、釣り船に乗ることはできなくなってしまう。

貴英がその男性を階段で追いこすとき、うしろにいる僕たちにも聞こえるくらいの少し大きな声で話しかけた。

「おじさん、この電車乗る??」

男性は声はださなかったがうなづいた。

新快速 川辺ゆき

その瞬間、発車を告げるベルは鳴り止んだ。僕たちはまだ階段の半分くらいだった。

貴英は「先に行くから」と階段をかけあがった。和人と僕はもう男性の

「釣竿」「クーラーボックス」を片手にもって走り出していた。

修平はその男性のうしろについた。

ベルが鳴り止み駅員さんが「お待たせいたしました、新快速川辺ゆき、ドア

がしまります。ご注意ください。」とアナウンスをした。貴英につづいて

和人と僕ももうドアの近くにいた。ゆっくり歩いて少しでも時間を稼いでいた。

車掌さんが振り返り階段の方を見た。そのとき男性と修平の姿が見えた。

修平が「すいません、乗ります」と手を振っていた。車掌さんは腕時計を一度

見た。ドアは閉めずに待っていてくれる。僕たちにつづいて男性と修平も電車に乗った。

と同時に車掌さんは笛を吹きドアを閉めた。男性は肩で息をしながら和人がはこんだ

クーラーボックスに座り込んでしまった。僕たちは男性の荷物を立てかけてた。

そして車掌さんに頭を下げた。おそらく車掌さんは気づいていたのだろう僕たちに

笑顔で応えてくれた。こうして「新快速川辺ゆき」は動き始めた。

要望書

男性も息が整ったのでこちらは前の車両へと歩き始めた。

あいかわらずこの電車も先頭から席がうまっている。

僕たちは8両目ぐらいに座った。貴英はさつき階段を駆け上がるときに

無意識に丸めてしまった算数ドリルを逆に丸めまっすぐにもどして
いた。

この新快速電車は約1時間で川辺駅に到着する。

僕は彼女とメールをしていた。修平は携帯のゲームをはじめていた。

「みなさま、よろしいでしょうか？」

和人がポケットから一枚のレポート用紙を取り出した。

和人を見るとレポート用紙ではなくボランティアたちへお年寄りたちから

寄せられる「要望書」だった。

「今日の活動はぜひこれをお願いします。」そういつて和人が「要望書」を

まわし始めた。「要望書」の件名は「見晴台の草むしり」と小さく
かわいい字で

書かれていた。件名の下には「町の高台にある見晴台からもう一度
町と海をながめたい」

とだけ書いてあった。それ以外は名前も書かれていなかった。

見晴台

「見晴台？ どこ？」修平が言うと「鈴木トキエさん家の裏の」と和人が応えた。

その瞬間、僕はわかった。「鈴木さん家の裏の空き地でしょ？」

「今は草がおいしげって荒れているけど昔はベンチがあってそこに腰掛けて

海を眺めたりできたらしいよ」和人は鈴木トキエに聞いていたらしい。

確かにあの空き地は高台だし海のほうに向いている。

「でもあの空き地ってどうやってはいるの？」修平がたずねた。

「そのへんを含めて今日みなさまにお願いしたいとおもってるんですけどね」と

和人がにこにこしながらこたえていた。

「和人、誰からの要望なんだよ」貴英がそう言ったときだった。

「さっきはありがとう」さっきの男性が僕たちの前に立っていた。

「ここいいかな？」と空いている席を指差し僕たちがうなづくとうつくりと腰掛けた。

僕が「どこから海電乗ったんですか？」とたずねると男性は新栄町からだという。

「新栄町」は僕たちが使う「本町」のひとつ手前の駅だ。

でも毎週火曜日の海電では見かけたことのない人だった。

男性

「乗換えが大変だ、とは聞いていたけれどこんなにきついとは思ってもいなかった」男性はそう言っつて少しはすかしい顔をしていた。

しばらく「海電」のことや「釣り」の話などをしていた。

男性が「お兄さんたちは何歳なの？」とたずねてきた。

貴英が「22歳で大学三年です」とこたえていた。

「お兄ちゃんたちは釣りじゃないよね」男性は不思議そうにぼくたちを

みていた。修平が「川辺のとなりの海寄町でボランティアをしています。」

ぼくたちは毎週火曜日だけですけど」そうこたえた。

男性はうなづきながら、ひとつお願いしたいことがあってとつぶやいた。

息子

「高校2年のうちの息子の面倒をみてもらえないだろうか」というすこしおとなしい性格で友達もあまりいないらしい。

ぼくたちは顔を見合わせた。そして貴英が「ボランテアさせるってことですか」

そういうと男性は首を横に振り「火曜日は学校だから。時間のあるときに会ったりして

もらえないだろうか」と話した。少しして和人が「じゃあ、浩一郎の花屋がいいんじゃない

い、ねっ、浩一郎」とぼくの肩をたたいた。ぼくは軽くうなづいた。そして男性に、となり駅の本町にある「木内生花店」の話をした。

「くわしい場所は・・・」そう言うと、「いや、木内さんはしつているけど」と

男性はこたえた。「そうですね、その息子です」とぼくがこたえるとお客さんらしい。

「いつでも息子さんと寄ってください。もちろん、息子さんだけでも平気ですから。

ぼくは木内浩一郎です。」と挨拶した。「河合です。新栄町の河合です。」と男性は

こたえた。息子さんのことをぼくたちにどうしても伝えなかったのか。男性はほつとした

表情をみせた。そして「今日はありがとう、もうすこし前の車両にいくから」と席をたち

ぼくたちに一礼して動いた。「浩一郎くん、大丈夫ですか」みんなに言われた。

「帰ったら店の人たちに新栄町の河合さんのこと聞いてみるから」ぼくはそうこたえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1242w/>

見晴台でもう一度

2011年10月13日14時54分発行